

私はそれを極力避けようとしたのですが、荒井先生は絶対それを譲ろうとはされません。私は昔から荒井先生に威圧されどおしなのです。生来強引な人間である私ですが、どういふわけか、荒井先生にだけは意義を申し立てられないのが不思議でしょうがありません。ただし、どうしてそうなるのか尋ねましたところ、先生は「日本ワイルド協会編、とするよりも、そうした方がよく売れるだろう」という、わけのわからない返事でした。私としても、本来協会から資金提供をしなければならないような専門書を無償で引き受けてくれた北星堂さんには大きい義理があるので、とにかく売らねばならないと思っていました。荒井先生の理由説明に反発できなかったわけであります。というわけで、会員の皆様方、会員価格（6,300円）を一冊でも多く買って下さるようお願い申し上げます。

## 「座談会」の発表要旨

川崎 淳之助

（聖徳大学教授）

事典というものの価値が、本文の内容いかんによるのは当り前の話である。しかし、個々の項目というものは決して単独に存在するものではない。それは他のいくつかの項目と互いに関連し合い絡まり合っているはずのものである。そういった関連や絡まり合いの箇所を明示するのが、事典における索引の効用の第一の意義であろう。それによって一つの項目ないし事項というものは、より広汎でかつより深い記述として読者によって捉えられることになるからである。事典本体にとって、いわば補助的なものでしかない索引というもの、事典において果す機能は、極めて重要なものと言わざるを得ない。

『ワイルド事典』作製に当たって、そんな視点から索引の仕事に当たったのが、北星堂編集長の本城正一氏、それにワイルド協会の荒井良雄氏、佐々木隆氏、そして私の四人である。

索引の原案を作製したのは本城氏である。氏は、本文をことごとく読破され、その中から索引項目となすべき人名や事項をしらみつぶしにピックアップし、膨大な一覧表を作製した。この大仕事だけで、すでに索引編集の仕事の大半は終わったといってもいい。私は本席を借り、感謝の念をもってこのことを報告したい。

残されたのはつめの作業である。抜けている項目はないか、削除すべき項目はないか、あるいは内容的に片手落ちになっている項目はないか等々といった点検作業、さらには不確定な表記統一の作業、さらにまた原稿に脱落していた原語表記の調査等々の作業である。

---

世界最初のワイルド事典出版という快挙を成し遂げて、爽快な気分です。執筆者の皆様と北星堂に感謝します。

## 「座談会」発言要旨

佐藤 喬

(慶應義塾大学名誉教授)

明日はたまたまオスカー・ワイルドの命日に当るが、その前夜祭(?)ともいうべき本日、この日本でこのような催しが行われていることに、ふしぎな因縁のようなものを感じている。

編集委員会では山田会長より、「ふだんはさぼりがちの佐藤も、今度はよくやった」とおほめの言葉を頂き、恐縮した。

私の発議で、サマセット・モームやアイリッシュ・アイデンティティなどいくつかの事項を項目として取り上げて下さったことを、うれしく思っている。

「まじめが肝心」の中のキューリのサンドイッチの件など、これまでは学生から質問が出ると自分で調べなくてはならなかったが、この事典にはそんなことまで載っているので、手間が省けて助かっている。まことに便利な本が出来たもので、これからの研究者はこの事典のおかげでどれだけ助かるか分らない。

この本のサブタイトルは「イギリス世紀末百科」となっているが、グローバルな観点からのゆき届いた編集がなされているので、この「イギリス」はむしろ無くてもよかったのではなからうか。

最近のアメリカの世紀末研究者の間には、「病気」をキーポイントにする傾向が見られる。ワイルドが梅毒だったとの視点から、彼の人と作品のすべてを説明しようとした本も出ている位なので、「病気」という項目を入れてもよかったかと思う。

ダヌンツィオについては、この事典でも方々にコメントされているが、世紀末ヨーロッパのデカダン文学運動に占める彼の存在の重要性を考えると、「ダヌンツィオ」という項目も入れてほしかった。

このように、まだ多少不備の感が残るものの、とにかくこのような立派な事典が完成されたことを、世のすべてのワイルド研究者と共に、心から喜び合いたいと思っている。

---